三国志

八

吉川英治

悠久の大自然と治乱興亡果てない大陸の歴史が育くんだ複雑な中国の人と心。魏蜀呉三国の覇権と政治の妙に学ぶ生甲斐と身の処し方。

六興出版

吉川英治

三国志

第八巻　図南の巻

三国志　第8巻（全10巻）

平成2年3月20日　初版印刷
平成2年3月25日　初版発行

著　者　吉川英治
発行者　賀來壽一
発行所　株式会社六興出版
〒112 東京都文京区水道2－9－2
電話　03（943）3431（代表）
振替　東京1-92448

印刷・製本　中央精版印刷株式会社
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan
定価はカバーに明記してあります。
ISBN 4-8453-0218-7 C0093

目

次

日輪……3
上・中・下……12
酒中別人……17
魏延と黄忠……22
短髪壮士……32
落鳳坡……37
破軍星……44
草を刈る……48
金雁橋……53
西涼ふたたび燃ゆ……65

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

馬超と張飛……72
成都陥落……86
臨江亭会談……95
冬葉啾々……104
漢中併呑……111
剣と戟と楯……121
遼来々……125
鵞毛の兵……130
休戦……135
柑子と牡丹……140

藤花の冠……147
神ト……152
正月十五夜……159
御林の火……166
陣前公用の美酒……173
敗将……182
老将の功……189
絶妙好辞……200
一股傷折……206
趙子龍……213

次男曹彰……220
鶏肋……227
漢中王に昇る……236
烽火台……242
生きて出る柩……251
関平……258
七軍魚鼈となる……265

図南の巻

日輪

一

呉侯の妹、玄徳の夫人は、やがて呉の都へ帰った。孫権はすぐ妹に質した。

「周善はどうしたか」

「途中、江の上で、張飛や趙雲に阻められ、斬殺されました」

「なぜ、そなたは、阿斗を抱いて来なかったのだ」

「その阿斗も、奪り上げられてしまったのです……それよりは、母君の御病気はどうなんです。すぐ母君へ会わせて下さい」

「会うがよい、母公の後宮へ行って」

「ではまだ……御容体は」

「至極、お達者だ」

「えっ。お達者ですって」

「女は女同士で語れ」

いぶかる妹を、膠もなく後宮へ追い立て、孫権はすぐ政閣へ歩を移して、群臣に宣言した。

「予の妹は、玄徳の留守に、その家臣共から追われ、今日、呉へ立ち帰った。かくなる上は、呉と荊州とは、事実上、なんらの縁故もないことになった。即時、大軍を起こして、荊州を収め、多年の懸案を一挙に解決してしまおうと思う。それについて、策あらば申し立てよ」

すると、議事の半ばに、江北の諜報がとどいて、

「曹操四十万の大軍を催し、赤壁の仇を報ぜんと、刻々、南下して参る由」と、あった。

俄然、軍議は緊張を呈した。

ところへ又、内務吏から、

「重臣の張紘、先頃から病中にありましたが、今朝、息をひきとるにあたり、遺言の一書を、わが君へと、認め終わって果てました」

「なに、張紘が死んだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

折も折である。呉の建業以来の功臣。孫権は涙しながらその遺書を見た。

張紘の遺書には縷々として、生涯の君恩の大を謝してあった。そして、自分は日頃から、呉の都府は、もっと中央に地の利を占めなければならぬと考え、諸州に亙って地理を按じていたが、秣陵（南京附近）の山川こそ実にそれに適している。万世の業礎を固められようとするなら、ぜひ遷都を実現されるように。これこそいま終わりに臨んでなす最後の御恩報じの一言であると結んであった。

「忠義なものである。この忠良な臣の遺言をなんで反古にしてよいものではない」

孫権は、一方には、刻々迫る戦機を見ながら、一面直ちに、その居府を、建業（江蘇省・南京）へ遷した。

かくてその地には、白頭城が築かれ、旧府の市民もみな移って来た。

また、呂蒙の意見を容れて、濡須（安徽省・巣湖と長江の中間）の水流の口から一帯にかけて、堤を築いた。これに使役される人夫は日々数万人、呉の国力の旺なることは、こうした土木建築にも遺憾なくあらわれた。

もちろんこれは、やがて来るべきものに対する国防の一端である。来るべきもの、それは曹操の南下だ。

曹操はそれよりもずっと早くから宿望の南征と呉への報復に専ら軍備の拡充を計っていた。

すでに四十万の大編成は、

「いつでも」と、いう態勢を整えたので、いよいよ許都を発しようとすると、長史董昭が諂って彼にこうすすめた。

「およそ古来から、臣として、丞相のような大功をあげられた御方は、是を歴史に見ても、求めることはできません。周公も呂望も、比較にはならないでしょう。乱世に立って、群盗乱臣を平らげ、風に櫛けずり雨に浴みし給うなど、三十余年、万民のた

めに、また漢朝のために、身をくだかれて来たことは、ひとしく天人倶に知るところです。今はよろしく、魏公の位に登って、九錫を加え、その威容功徳を、天下に見せ示すべきでありましょう」

二

どんな英傑でも、年齢と境遇の推移と共に、人間のもつ平凡な弱点へひとしく落ちてしまうのは是非ないものとみえる。

むかし青年時代、まだ宮門の一警手にすぎなかった頃の曹操は、胸いっぱいの志は燃えていても、地位は低く、身は貧しく、稀々、同輩の者が、上官に媚びたり甘言につとめて、立身を計るのを見ると、（何たるさもしい男だろう）と、その心事を憫み、また部下の甘言をうけて、人の媚びを喜ぶ上官にはなおさら、侮蔑を感じ、その愚をわらい、その弊に唾棄したものであった。

実に、かつての曹操は、そういう颯爽たる気概をもった青年だった。

ところが、近来の彼はどうだろう。赤壁の役の前、観月の船上でも、うたた自己の老齢をかぞえていたが、老来まったく青春時代の逆境に嘯いた姿はなく、ともすれば、耳に甘い近側のことばにうごく傾向がある。

彼もいつか、むかしは侮蔑し、唾棄し、またその愚を笑った上官の地位になっていた。しかも今の彼たるや人臣の栄爵を極め、その最高にある身だけに、その巧言令色にたいする歓びも受け容れかたも、到底、宮門警手の一上官などの比ではない。

いま重臣董昭から、

（この際、魏公の位に登って、九錫を加えられては如何ですか）

と、すすめられると、曹操はなにを憚る考えもなくすぐに、

（そうだ、なぜ自分は、今まで九錫を持たなかったろう）

と、すぐその気になって、朝廷にそのゆるしを求めた。もちろんその意のままになる。彼は以後、魏公と称し、出るも入るも、九錫の儀仗に護られる身となった。

九錫の礼というのは、

一　車馬　大輅、戎輅。大輅ハ金車、戎輅ハ兵車ノ事。黄馬八匹。

二　衣服　王者ノ服。袞冕赤舄。朱ノ履タル事。

三　楽県　軒県ノ楽、堂下ノ楽。昇降必ズ楽ヲ奏ス。

四　朱戸　門戸ハ紅門ヲ以テ彩ル。

五　納陛　朝陛ヲ登ル自由。

六　虎賁　常時門ヲ衛ル軍三百人、虎賁軍トイウ。

七　鈇鉞　鈇鉞各々一、鈇ハスナワチ金斧、銀斧ナリ

八　弓矢　彤弓一、彤矢百、玈弓十、玈矢一千、朱弓、黒弓ナリ。

九　秬鬯　祭祀ヲ行ナウタメノ酒。

これをみた荀彧はかなしんだ。以前の曹操とは次第に変わって来るのを冷静に彼のそばで眺めていたのは、彼よりは年下のこの荀彧という忠良な一忠臣だった。

「丞相。すこしあなたも、お年をお召しになり過ぎはしませんか」

「なぜだ」

「愚に返ったところがお見うけされます」

「予が九錫の礼を持ったことを言うのか」

勃然と、曹操は、色をうごかした。荀彧は、静かに、

「そうです。功いよいよ高きほど、御自身は、退謙をお示しあるべきです。然らずんば、せっかく、三十余年、旗に漢室への忠誠をかざし、口に万民のためと称しながら、結局、あなた御自身の慾望に過ぎなかったということになりましょう。弱冠、生死の迷妄を捨て、百戦苦闘、今日を築いて来ながら、そ

の精神と節操を、門の飾りや往来の見得などと取り替えるなどは、実につまらぬ人生の落ちではありませんか」

涙をふくんで諫めると、曹操はぷいと席を去って、「おいおい、董昭をよべ」と近侍へいいつけながら、大歩して去ってしまった。

以来、荀彧は、病と称して、自邸にひき籠ってしまった。建安十七年冬十月、いよいよ南下の大軍は都を出ることになったが、彼はなお、曹操から呼びに来ても、

「このたびは御供できません」

と、参加を辞した。

ついに、使者が来た。

「魏公からのお見舞いである」

と、使者は、食物の入っている一器を彼の前に贈った。

見ると、器の上には「曹操親ラ之ヲ封ス」という紙が懸けてある。あとで開いてみると、器の中には何も入っていなかった。

「お気持はわかった。……噫」

荀彧は、その夜、自ら毒を服んで死んだ。

三

すでに南征の大軍は、水陸から続々と呉へ下っていた。

途中、曹操へ、都から知らせがあった。

「荀彧が毒を服みました」

「……自害したか」

曹操は瞼をとじた。ほろ苦い眉をひそめて。

暫く黙っていたが、やがて、

「荀彧は、ちょうど五十歳だったな。不愍なことをした。敬侯と謚してやれ」

それきり何も言わなかった。多少、悔ゆる色が無いでもない。

日をかさねて、行軍は安徽省に入り、濡須の堤を前にして、二百余里に亙る陣を布いた。

「まず、敵の大勢を見よう」
曹操は、山へ登った。そして遙かに、呉の陣を見わたすと、長江の支流は百腸のように曠野を縦横にうねり、その一つの大きな江には数百艘の兵船が望まれる。
敵はその辺りを中枢として水陸に充満していた。船櫓の鳴るところ旗ひらめき、剣槍の耀くところ士馬の声震い、草木も挙って、国を防ぐために戦いているかと思われた。
「ああさすがに呉は南方の強国だ。この士気では油断はできぬ。汝等も努めてふたたび赤壁の不覚をくりかえすなよ」
左右の大将を戒めながら彼が山を降りかけた時である。轟然、どこかで一発の石砲がとどろいた。その砲声からしてすでに北国にはない強力な硝薬の威力を示している。
「すわ」
と、噪ぎたつ間もない。山の麓近くの江から忽然と喊声が起こった。いつのまにか附近の蘆荻の蔭から無数の小艇があらわれ、呉の精猛が煙のように堤をこえて突貫して来る。正に、魏の中軍へいきなり楔を打ちこんで来たかたちだ。
「退くな。奇襲の敵は少数ときまっている」
曹操は、山を降りると、敢然、陣頭に出て乱れ立つ味方をととのえた。
すると彼方の堤の上に、青羅の傘蓋を翳し、星の如き群将に守られていた呉侯孫権が曹操を認めると、馬をとばして馳けて来た。
「赤壁の亡将、まだ生命をぬすんでいたか」
その声に、曹操は振り向いた。
碧眼、紫髯、胴長く、脚短く、しかも南人特有な精悍の気満々たる孫権。槍をふるって、石弾の如く突いて来た。
「何者だっ」
わざと曹操は大喝した。自分よりはるかに若い孫権と、剣槍をもって闘う気はない。威だけを示して

逃げようとした。

「逃ぐる勿れ。魏賊」

と、その気を察して、孫権の左右から、韓当、周泰のふたりが分かれて、曹操のうしろへ迫った。

危地に陥ったかと曹操の身が困難に見えたとき、彼の味方もまた、鼓を鳴らして、孫権のうしろを突き崩し、乱軍の相を呈しかけた機に、魏の許褚は、刀を舞わして周泰、韓当を退け、辛くも曹操を救い出して、中軍へ帰った。

この晩、いちど退いたかとみえた呉軍が夜半に又、四面の野や小屋に火をはなって、夜襲して来た。

遠征の疲労にあった魏の兵は、不覚にも不意をくって、呉の勢に馳け破れ、夥しい死者をすてて総軍五十里ほど陣を退くのやむなきに立ち至った。

「われながら、まずい戦」

曹操は悶々、自己を責めた。幾日かを空しく守りながら陣小屋の内にかくれて、凝と軍書にばかり眼を曝していた。

なにか、天来の妙計を、それから求めようとしている悶えがわかる。跫音をしのばせて、そっと入って来た程昱が、

「丞相。おつかれではありませぬか」と、声ひくく慰めた。

「……おお、程昱か。呉の堅陣に対して打つ手がない。初手の戦も、彼の攻勢に、味方は漸く防いだのみだ」

「抑々。このたびの御出陣は遷延また遷延をかさね、ちと遅すぎました。故に呉は国防に全力を賭し、その期間に濡須の堤まで築いてしまった程です。如かず、一応引き揚げて、ふたたび御出征を図られてはどうですか」

その晩、曹操は、ふしぎな夢を見た。焔々たる日輪が雲を捲いて、空中から大江の波間に落ちたとみて眼がさめたのである。

四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.